

## ES 研第7回例会 報告要旨

筆写行為の修道院靈性における基礎づけ——トリテミウス『写字生の賛美について』を中心に

北村直昭

ドイツ初期人文主義者トリテミウス(1462-1516)は、日本では魔術思想に傾倒した人物として紹介されることが多い。しかし、彼の全生涯の活動と著作が研究されるようになると、ベネディクトゥスの靈性を重んじ、修道院長としてブルスフェルト修族の改革を担った業績が評価されるようになっている。

その修道院改革の流れの中で、ベネディクト派修道院のかつての繁栄を回復し、改革を促進するために、筆写と写本作成を奨励する著作を依頼されて著されたのが『写字生の賛美について』*De Laude Scriptorum* (以下『賛美』と略す)である。その内容は筆写行為をさまざまな角度から説明するものとして、また、中世修道院靈性において筆写行為がどのように基礎づけられているかを証言するものとして貴重な手がかりとなる。というのも、これに関する説明でしばしば参照されるものにカッシオドルスの『綱要』第1巻がある。しかし、聖ベネディクトゥスの教えに従う人々にとっての筆写行為の説明を、必ずしも同じ靈性を共有しているわけではないカッシオドルスの説明で代えることは十分ではない。また、筆写の価値を賞賛する一般的な説明だけでは、日々の修道生活のリズムを規定する『規則』との整合性の問題も生じる。

たとえば、筆写が「労働」の中でも最も価値あるものとして「祈り」に相当する価値を有するといわれるとき、祝祭日に「筆写」が行われるべきかどうか。あるいは、聖書や教父著作以外の世俗テキストを筆写する行為がどのように評価されるのか等々。そこで、本報告ではこの著作を紹介しながらベネディクト派修道院長にして修道改革者の立場にあるトリテミウスにおいて、筆写行為の基礎づけがいかなるものであるかを検討した。

『賛美』のなかで一貫していることは、カッシオドルスやその他の修道院作家に連なる伝統に忠実であることと、ベネディクトゥスの『規則』にもとづいて全てを説明しようとする姿勢である。悪徳の源泉となる怠惰をさけるための手仕事のうち、最善のものとして筆写が推奨される。さらに、筆写は神の教えを広める使徒的活動とも位置づけられるが、説教より筆写の方が優れていることが強調される。これら伝統的な説明に加えて、筆写活動の実際的な場面での説明では、ベネディクトゥスの『規則』の精神に則った指示が下されている。たとえば、筆写すべきテキストは、自ら選ぶべきではなく、修道院長らの指導に従うよう指示される。これにより、それ自体靈的価値をもつ筆写の実践をつうじて、さらに服従、従順の教えをも実践することが重んじられる。そのため、筆写するテキストが世俗作家のものであっても、それを筆写する行為自体は修徳修行と見なされることになる。一方、祝祭日の場合には、労働よりも祈りと自己の教化の面を重視して、筆写するテキストは靈的著作に限定するよう勧められる。

ここで紹介できるのはごく一部であるが、報告では『賛美』には筆写についての情報が豊富に含まれることを紹介した。今後は、15世紀の修道院改革やドイツ初期人文主義をはじめとする当時の時代背景、思想状況との関連を中心に検討していきたい。